

福島・尚志高校サッカー部監督

仲村 浩二さん(41)=郡山市

福島県郡山市の私立尚志高校サッカー部は、原発事故直後、監督の母校、習志野高校から再び歩み始めた。あの時から3度目の春。入学時に「不安はないか」と一人ずつ意志を確認した。かつての新人部員たちが、巣立ちの時を迎えた。送る会でいざつした3年生一人一人が家族や仲間らへの「感謝」を口にした姿に、自らの思いが間違いない伝わっていたとの感激で胸がいっぱいになった。

千葉市内で生まれ、習志野高校3年時、主将を務めて全国高校サッカー選手権大会ベスト8。順大1年の時にはバルセロナ五輪予選待ちに待った練習再開の日

福島東日本大震災
3年
千葉



> 中 <

の日本代表に選ばれた。大学卒業後の1994年、当時福島にあったJFLのチームとプロ契約。チームは財政難で消滅したが、経歴を買われて尚志高校に招かれた。千葉を中心に関東各

県から選手が集まり、県内常勝を築いた矢先、震災と原発事故に見舞われた。

当時、情報が錯綜(さくそう)し、見えない放射能の恐怖に誰もがおびえた。

「親が心配している。早く送り届けないと」。関東出身の部員を、自らがハンドルを握るバスに乗せた。13時間に及んだ移動の最終地点はJR蘇我駅。真夜中に迎えに来た保護者から「ありがとうございました」と涙ながらに言われた。

2011年3月27日。チ

生徒に伝えた「感謝」の心



「全国制覇」の大きな横断幕を掲げ、笑顔で練習を見つめる
仲村浩二監督=福島県郡山市の尚志高校

習志野高から再出発

てくれた母校と関係者の心意気への深い感謝。「いろんな人のおかげで、またサッカーができるんだぞ。いのだろうか」。何度も考めた末、「一つの答えを出した」。「自分たちにはサッカーしかない。サッカーで福島の希望になろう」。ユニホームやボール、スパイクをたくさん送ってくれた全

ててくれた母校と関係者の心設けていた。練習前には線量の計測が欠かせない。「サッカーなんてやつていて良いのだろうか」。何度も考めた末、「一つの答えを出した」。「自分たちにはサッカーミーティングで泣きながら選手たちに話し掛けた。

が訪れた。ケラウンドを走り、ボールを追う選手たち。顔はサッカーができる喜びであふれていた。胸にあつたのは、全国大会で対戦するかもしれないライバルを、快く受け入れ

新年度を迎えた4月4日、選手と学校へ戻った。途端に、現実に引き戻された。当時、国は屋外活動に際して放射線量毎時3・8

が訪れた。ケラウンドを走り、ボールを追う選手たち。顔はサッカーができる喜びであふれていた。胸にあつたのは、全国大会で対戦するかもしれないライバルを、快く受け入れ

新年度を迎えた4月4日、選手と学校へ戻った。ホームやボール、スパイクをたくさん送ってくれた全

国の支援に答えるためにも。心は決まり、迷いは消えた。夏の全国高校総体はベスト8。年末年始の全国高校選手権大会は福島県勢初の3位に。本当に「福島の希望の星」となり、地元に明るい話題を提供した。「選手たちは『福島に勇気を』という強い気持ちでプレーしていた」。

郡山市内は落ち着きを取り戻しつつある。それでも「3・11」が近づく度、強く感じる。「普通にサッカーができることが、どんなに幸せなことか」。選手権大会にはあの「特別な1年」以来、出場できていない。「今年こそは、選手たちと一緒に立つ」と誓った。